Paul Klee, Angelus Novus

フランス文学研究室 NEWS

令和4年 4 月　第 10 号

本号の内容

1. イベント報告
2. 在学生数
3. 卒業･修了生進路
4. 学部生の声
5. プレゼンテーション大会
6. ゴンクール賞
7. 編集後記

イベント報告

令和 3 年 9 月 21 日
日本学国際共同大学院（GPJS）企画　ギ・コル准教授（コートジボワール，アラサン・ワタラ大学）講演会「The development of Japanese Language Education in Côte d'Ivoire : history, teaching methods and tools」（オンライン）
上智大学文学部フランス文学科　永井敦子教授と黒岩卓准教授の共同企画

令和 4 年 3 月 4 日
プルリリンガリズム・シンポジウム
文学研究科・高度教養教育学生支援機構　主催

卒業･修了生進路

学部生：凸版印刷
博士学生：大谷大学助教

在学生数

学部生：12 名
博士後期課程：3 名
博士前期課程：4 名
研究生他：2 名

学部生の声

2020 年度入学生は入学直後にコロナ禍に直面し、およそ 1 年の間オンライン形式のみでの授業の受講を余儀なくされました。幸いにも 2021 年度から徐々に対面授業が再開され、先生方の謦咳に接し、友人たちと語り合う、大学ならではの濃密な時間を過ごす機会は確実に増えています。哲学専修の新 3 年生小松澤亮晴君から 2 年前期に受けた初めての対面授業の様子を踏まえながらヴァレリーの文章への思いを綴った記事を寄せていただきました。

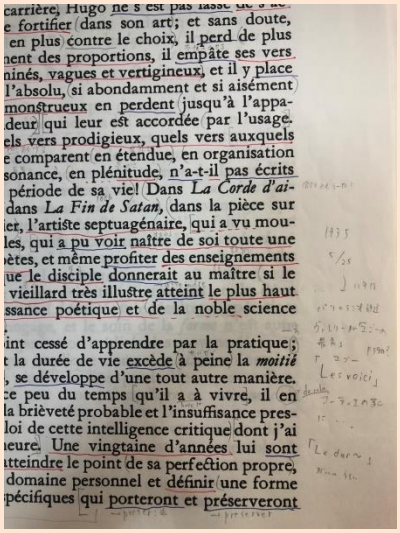
フランス文学基礎講読の思い出―『ボードレールの位置』を読んで―

先年度の今井先生の基礎講読でポール・ヴァレリーの評論文『ボードレールの位置』を読みました。この文章のなかでヴァレリーは 19 世紀前半に一世を風靡したロマン派やエドガー・アラン・ポーの影響を踏まえながらボードレールがいかにして偉大な詩人になったかを分析しています。

それでは、ヴァレリーのこのテクストの中でも、私個人にとって特に重要な意味を持つ名文を、一つ紹介したいと思います。以下は、このテクストの中で、ヴァレリーがロマン主義を批判している箇所からとったものです。

L’adolescence des nouveautés est avantageuse. La sagesse, le calcul et, en somme, la perfection ne paraissent qu’au moment de l’économie des forces.
（新しさを求める青年期は傲慢なものです。分別、計算、つまり完璧さは力を節約する時になって初めて現れるのです。）

ここで筆者は、青年期 l’adolescence とロマン派を重ね合わせながら、独自の人生論を披露していますが、率直に言って、私はいまだにこの文の意味を満足に理解することができずにいます。特に腑に落ちないのは「力の節約 l’économie des forces」によって完璧さを目指すというくだりです。これは逆説的な表現のように思われます。たしかに、ありあまる力を節度なく使い尽くそうとすることは、乱暴さにつながり、ともすればそのせいで作品がまとまりのないものになってしまうことさえあります。ここでいうところの「力の節約」とは、力をわざと抑えて作品を簡素なものにして済ませようとするような消極的で控えめな行為ではなく、むしろ力を抑えることによって逆に作品を豊穣なものにしようとする積極的で創造的な行為なのでしょう。単なる「手抜き」とは全く趣を異にしているのです。とはいえ、私のような青年期にある者が、力をあえて節約することによって完全を目指そうとするような、そんな境地を体得することはそう簡単なことではありません。それを感覚的に理解するには、おそらく膨大な時間と経験が必要になるのでしょう。そういうこともあって、私はこの文を思うたびに、どうしても、どこかもどかしい思いをせずにはいられないのです。だからこそヴァレリーのこの文は、きっとこれからの私の人生の中でずっと私から離れることなく存在し続けるのでしょう。そういう文に偶然巡り会ったということに、今こうして原稿を書きながら、運命の、なにか巨大な根本的なものに触れたような思いがしています。


carrière, Hugo ne s’est pas lassé de s’en
e fortifier dans son art; et sans doute,
en plus contre le choix, il perd de plus
nent des proportions, il empâte ses vers
ninés, vagues et vertigineux, et il y place
l’absolu, si abondamment et si aisément
monstrueux en perdent jusqu’à l’appa-
deur qui leur est accordée par l’usage.
els vers prodigieux, quels vers auxquels
e comparent en étendue, en organisation
sonance, en plénitude, n’a-t-il pas écrits
période de sa vie! Dans *La Corde d’ai-*
dans *La Fin de Satan*, dans la pièce sur
ier, l’artiste septuagénaire, qui a vu mou-
les, qui a pu voir naître de soi toute une
ètes, et même profiter des enseignements
ue le disciple donnerait au maître si le
vieillard très illustre atteint le plus haut
ssance poétique et de la noble science

int cessé d’apprendre par la pratique;
t la durée de vie excède à peine la *moitié*
, se développe d’une tout autre manière.
ce peu du temps qu’il a à vivre, il en
la brièveté probable et l’insuffisance pres-
loi de cette intelligence critique dont j’ai
heure. Une vingtaine d’années lui sont
atteindre le point de sa perfection propre,
domaine personnel et définir une forme
pécifiques qui porteront et préserveront

熱心な勉強ぶりが伝わってくる講読テクスト

（文学部 3 年　小松澤亮晴）

インタビュー　フランス語プレゼンテーション大会

2021 年 11 月、京都外国語大学主催の日本学生フランス語プレゼンテーション大会で見事準優勝に輝いた文学部 4 年の徳田沙弥さんにお話を伺いました。

―プレゼンテーション大会に出場しようと思ったきっかけは？

東北大の過去の先輩方が同じ大会に出場されて受賞されているのを見たのが、最初に興味を持ったきっかけです。3 年間学んできたフランス語を使って私も先輩方のようにスピーチがしてみたいと思い参加することにしました。

―ご自身のプレゼンテーションの内容をお聞かせください。

この大会では発表者がテーマを自由に決めることができます。私は、「江戸時代の文学から学ぶ」という題にしました。仮名垣魯文の『安政箇労痢流行記』という、安政 5 年にコレラが流行した当時の江戸の様子について書かれた書物を取り上げ、安政 5 年の江戸の状況とコロナウイルスが流行する現代について発表しました。

『安政箇労痢流行記』

―練習を通してどのようなことを学びましたか？

自分の考えを文章にまとめ、フランス語に訳すという作業は予想以上に難しく、普段はあまり意識していませんでしたが、人に何かを伝えることの難しさを実感しました。そんなとき、指導してくださった深井陽介先生から「人に伝えるときはシンプルに、パラフレーズすることが大切」というアドバイスを頂き、とにかく簡単に分かりやすく伝えることを意識しました。

フランス語の発音やイントネーションにも注意を払いました。先生に細かくチェックしていただいたり、フランス語のニュース番組でネイティブのイントネーションを学んだりして、フランス語の発音がより自然で滑らかになるよう工夫しました。

また、深井先生から原稿を「楽譜」だと思って自分で作曲した曲を演奏するイメージで話すといいというアドバイスをいただき、間を置く場所、強く/弱く読む所、ゆっくり/勢いよく読む所などを決め、練習のときに意識するようにしました。

―本番の感想をお聞かせください。

今回の大会はオンライン開催となりました。約 7 分のプレゼンの後、質疑応答がありました。プレゼン中は聞き手の表情が見えないということもあり、オンライン開催特有の緊張感がありました。

―最後に、協力してくれた先生方、同級生のみなさんに一言お願いします。

大会に出場するにあたって、本当にたくさんの方からアドバイスを頂きました。指導してくださった深井陽介先生、クロエ・ベレック先生、本当にありがとうございました。そして支えてくれた展開フランス語Ⅳのクラスメートの皆さん、本当にありがとうございました。

特集　日本の学生が選ぶゴンクール賞

「日本の学生が選ぶゴンクール賞」とは？

ゴンクール賞という名前は一度フランス語・フランス文学を勉強したことのある人ならだれでも一度は耳にしたことがあるでしょう。これは作家エドモン・ド・ゴンクールの遺言により創設されたフランスで最も権威のある文学賞の一つで、年に一度アカデミー・ゴンクールによって将来性のある若手作家の手になる散文作品に対して賞と賞金が与えられるというものです。賞金はたったの 10 ユーロ。恋人に何か良いものを買ってあげるにはちょうどよい額ですが、これはあくまで象徴的なものなのです。フランスにはいわゆる「大人の」ゴンクール賞とは別に「高校生が選ぶゴンクール賞」があります。この他、毎年世界各国で「大学生が選ぶゴンクール賞」が開かれており、世界各地の大学が参加しています。そして、2021 年。日本もこれに名を連ねることになりました。「日本の学生が選ぶゴンクール賞」の始まりです。かつては創作といえば仏文、といわれ、文学界をけん引する有名な作家・批評家の多くがフランス文学科の出身でした。偉大な文学者たちに刺激されて仏文の門も叩いた、という人も少なくありません。しかし、全盛期は過ぎました。今ではフランス語やフランス文学を勉強する学生は減少の一途を辿っています。今回の取り組みには日本のフランス文学の世界を心肺蘇生させるという目標がありました。

Choix Goncourt du Japon

Le premier Choix Goncourt du Japon proclamé le 29 mars 2022

Contexte :
Le Japon lance en 2021, le premier *Choix Goncourt du Japon*, sous l'égide de deux grands écrivains, Madame Marie NDiaye et Monsieur Masatsugu Ono. Il sera proclamé le 29 mars 2022 à Tokyo.
Le Choix Goncourt du Japon est mené dans 5 régions, par 8 comités de lecture animés par des professeurs d'université bénévoles réunissant une douzaine d'étudiants par comité. Les étudiants participent à 6 mois de lecture, de découvertes, d'échanges, de critiques autour de quatre livres de la deuxième sélection du Goncourt.

L'Institut Français du Japon (*Stéphane Martin, Conseiller culturel, Chloé Becqueriaux, Attachée livre, débat d'idées et médiathèque*), en collaboration étroite avec le comité directeur du Goncourt du Japon, Nao Sawada (Univ. Rikkyo), Corinne Quentin (Bureau des Copyright français), Michaël Ferrier, (Univ. Chuo) appuiera ainsi sa politique de soutien au monde de l'écrit et au rayonnement de la langue française au Japon. Le Choix Goncourt du Japon aura ainsi pour objectifs concrets de dynamiser l'apprentissage du français dans les universités japonaises tout en encourageant les éditeurs à traduire plus de littérature contemporaine française. Cette opération sera appelée à devenir l'une des composantes de la programmation littéraire du poste.
Le Choix Goncourt du Japon est placé sous le haut patronage de l'Académie Goncourt. Il sera proclamé à l'Ambassade de France à Tokyo.

フランス･ゴンクールアカデミーのホームページで紹介された「日本の学生が選ぶゴンクール賞」

プロジェクトの具体的な内容ですが、アカデミー・ゴンクールから指定された 4 つの作品を全国の学生がブロックごとに集まり、先生方の手厚いサポートを受けながら読書会形式で読解していくというものです。最終的には各ブロックの代表が 3 月末に東京のフランス大使館に集まって合議を行い、受賞作を決定しました。いうまでもなく日々の読書会はオンライン開催でした。読書会で話し合われたことは議事録にまとめられ、ホームページやスラックを通して全国的に共有されます。三人寄れば文殊の知恵、ともいいますが、さすがに学生だけでフランス語の文章に挑みかかるのには無理があります。そこで、全国の大学の先生方が手分けして作品の梗概や一部翻訳を載せたシノプシスを作ってくださり、学生たちの読書の支えとなりました。

フランス文学界復活をかけた一大プロジェクトに参加する学生の二人から読書会を通して学んだこと、プロジェクトに寄せる思いを綴っていただきました。

「読書」を学ぶ

「日本の学生が選ぶゴンクール賞」選考委員としての活動が本格化してからはや 5 か月が経つ。私がこれまで読んできた作品のなかで最も印象に残っているのは Clara Dupont-Monod « S'adapter »で、セヴェンヌ地方の豊かな自然を背景に障害を負って生まれてきた子供と向き合う一家族を描いた希望に満ちた物語だ。

文学作品を読むことは、単なる長文読解とは違う。文法的に読むだけではなく、筋を理解し、表現の特徴を捉え、さらに解釈をすることが「読む」ということになる。そのことをこのプロジェクトから改めて教えられた。

« S'adapter »でいえば、自然の描写や使用されている人称、音を重視した言葉選びなどが表現の特徴になる。そして、これらの表現をふまえて物語をどう解釈していくかは、読み手である私たちにかかっている。辞書や文法書はあくまでヒントで、最終的には自分で結論を出さなければならない。これが本当に難しい。飛躍した解釈では駄目だし、かといって文字通りに読むだけでは足りないこともある。緻密な思考が求められるのだ。

ミーティングでは他の学生の発言を聞くことができ、自分にはなかった着眼点を得られる。これが他者と読書をともにすることの醍醐味だと思う。

このプロジェクトに参加してからというもの、自分の読みの浅さを日々痛感している。私がこのプロジェクトを通して学んだもの。それは他でもない、これまで誰も教えてくれなかった「読書」なのだ。

（文学部 3 年　堅田佳乃）

充実した読書体験

今回のプロジェクトの最大の収穫は自分の意見を、自信をもって他者に伝えられるようになったということです。私の所属している東北・北海道グループでは、フランス語の原文の読み取り及び小説が扱うテーマについての議論を行ってきました。それのおかげで、回を重ねるごとに、自分が正しいと思ったことを臆することなく他の人に伝える勇気とそれを分かりやすく伝えるための技術を身に着けていくことができました。交流の輪が広がったことも良かったです。僕は工学部に属しているため、普段の学生生活で文系の方と交流する機会はあまりありませんでした。そのため、今回のプロジェクトを通して知り合った文系の皆さんのものの見方や考え方はとても新鮮で、よい刺激になりました。文学作品について他の人と語り合うという経験それ自体も価値のあることだったと思います。私たちが読んだ小説はどれもアクチュアルで議論のしがいのあるテーマ（例えば家族や戦争、SNS での炎上、文学の意味など）を扱っており、そうしたテーマに関して意見をぶつけ合うことは大変有意義なことだったと思います。そしてなによりも、文章を緻密に分析することで自分が気にも留めなかったようなところに筆者の隠れた意図や工夫があることが分かったときの驚きは忘れられません。

（工学部 2 年　堀多寿来）

編集後記

コロナウイルスの世界的な感染が始まってからはや 2 年が経ちますが、このウイルスが引き起こした歴史的なパンデミックは未だに収束する気配を見せません。これに加えて海の向こう側ではよその国を侵略する政治家まで現れました。感染症に戦争。不穏な空気が漂っています。3 月の末には 12 年前のあの日を思わせるような大きな地震が東日本を襲い、研究室も大きな被害を受けました。さいわい、皆さんの協力により仏文研究室は復旧に向かっています。

そのようななか、編者である僕は高校時代に愛読した『方丈記』などの日本の古典を手に取ることが多くなりました。平安朝の人々が抱いていた無常観を僕自身も感じるようになったからでしょう。長明の筆になる死屍累々たる洛中の描写は今や不気味なリアリティを帯びています。ある日の日記に僕はこう書きました。「今の世こそ末法の世。」

天地が崩れることが決して「杞憂」ではなくなったかに見える今日この頃。失恋や健康状態の悪化も重なり、ともすると気が滅入りそうになるような日々のなかで、この「研究室 NEWS」の編纂の仕事は僕自身にとって大きな励みになりました。衒いのない文章や率直に語られる言葉から浮かび上がる仲間たちの真剣な顔つき、一丸となって厚い壁に挑もうとする勇敢な姿。読者の皆さんもこのニュースレターの文字の裏側に脈打つ力強い鼓動を感じとられたのではないでしょうか？藤原定家は『明月記』のなかに有名な一節を残しました。「紅旗征戎、我ことにあらず。」世の中では源平合戦などといって騒いでいるようだが、俺にはそんなことは関係ない、と王朝末期の青年詩人は高らかに宣言しています。現代の青年はどうでしょう。「悟りの世代」でしょうか？僕にはそうは見えません。少なくとも僕の身の回りには定家のような気概をもった優秀な仲間たちがたくさんいます。

僕の誇れる仲間たちと、僕自身の思いが詰まった「研究室 NEWS」を暖かな春風に載せてお届けします。これからも僕ら若い世代の躍動する姿をどうか温かくお見守りください。

（学部 3 年　佐藤勇人）

新学期前夜の研究室

フランス文学研究室ホームページ
http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html

情報随時更新中！ぜひのぞいてみてください。
『フランス文学研究室 NEWS』に関するご意見等は以下の宛先までお寄せください。

TEL/FAX：022-795-5973
E-mail : rom14imp@gmail.com